

## 【研究ノート】

# 『共産党宣言』の普及史から

——短い表題・最初の連載・初版の部数——<sup>1</sup>

橋本直樹

## （要旨）

「昨年上梓した『『共産党宣言』普及史序説』（八朔社）から下記3点を敷衍し、内容をさらに展開して報告する。

1. 近年わが国では1872年独語版を根拠に、表題は「党」を除いた『共産主義〔者〕宣言』であるべきで、それがマルクスの本意だとの説が提起され、今も一定の影響をもっている。しかし、わずかでも刊行経緯を見れば、謬論妄説だと分かる（拙著第9章IV及び第11章）。
2. 最新の研究では、初版（1848年2月刊）の刊地は表紙・扉の記載通りでなく、翌3月3日から『宣言』全文を連載した『ドイツ語ロンドン新聞』の印刷所である。同紙社主で実質上の主筆ブラウンシュヴァイク公カール2世は19世紀ドイツで唯一革命によって玉座を追われ、復帰を目指していた。なぜ初版の印刷や連載を許可したのか（同第5・6章）。
3. 思想の影響力を見る上で重要な初版の部数は従来約千部であった。しかし、異本の検討と上記刊地の新説から1万部程に激増する可能性が高い（同第1～6章）、——以上。」

（『社会思想史学会第42回大会 大会プログラム・報告集』2017年、46ページから）

---

<sup>1</sup> 本稿は、2017年11月5日（日曜日）15:00～17:00、京都大学 吉田キャンパス 法経済学部本館 第6教室で開催された社会思想史学会 第42回大会・セッションH「18・9世紀ドイツの社会経済思想——マルクスの思想を考える」での拙報告を若干の補訂を加え、「研究ノート」の体裁をとって掲載するものです。本稿中、「報告」等の語があり、またデスマス体であるのはその故です。この点、ご海容ください。

なお、セッション当日、司会をしてくださった原田哲史関西学院大学経済学部教授および大塚雄太名古屋経済大学経済学部准教授、同じく報告者であった植村邦彦関西大学経済学部教授、討論者（コメンテーター）をお引き受けくださった八木紀一郎摂南大学経済学部教授には大変お世話になりました。記して謝意を表します。

(報告本文)

1. 『共産党宣言』1872年ドイツ語版の短い表題を廻る諸問題について

この問題状況について、今日の報告者でもある植村さんが明解に整理されています〔稿末の(資料1)。そこでの参考文献は引用箇所に関連するものだけを抜き出して挙げてあります〕。

また、その中で報告者(橋本。以下、同じ)に対して宿題が出されていました。拙稿を落ち着いて読んでいただけたなら、その時点でも宿題の答えは出していたつもりだったのですが。とにかく、なぜ、植村さんが「しかし」と書かれるのか、不得要領でした。「このように短い表題が支配的となった諸事情はそれとして検討されなければならないが今それは措く」と、奥歯に物の挟まったような書き方をしたのがいけなかったのかもしれない。

報告者は、その後、1998年に「このことの意味」を明確に示して、いわば植村さんから頂戴した宿題は済ませました。上記拙著の第9章の第IV節「『共産党宣言』の二つの表題について」の部分(拙著251～254ページ)です(第9章の初出は『経済』1998年2月号)。以下、デスマス体にして掲げておきます。

『共産党宣言』のドイツ語の表題は Manifest der Kommunistischen Partei です<sup>2</sup>。文字どおり「共産主義の党の宣言」あるいは「共産主義者の党の宣言」という意味です。しかし、周知のように Das Kommunistische Manifest という、略称ないしは通称と言ってよいと思われる別称があります。文字

<sup>2</sup> 『共産党宣言』のこの当初の長い表題について、なぜ「共産主義」、「党」、「宣言」の3語で成る表題となったのかを考察した拙稿「『共産党宣言』という表題にした理由」『経済』第272号、新日本出版社、2018年5月、140～148ページをご覧ください。なお、そこでは『共産党宣言』として、表題に「党」が明確に冠されたことについて、その根拠を探って、それは、①マルクス/エンゲルスが近代的民主的政党を志向していたこと、また、②とりわけ遅れたドイツでのブルジョア革命勃発後の活動を見通して、共産主義者同盟の実態は「秘密結社」であったにもかかわらず、そのことを自ら十分承知の上で、「党」を自称しようとしていたことにある、という理解を述べています。この理解は、筆者(橋本)が共産主義者同盟がすでに近代的民主的政党に実際にもなっていたと見ていることを意味するものではありません。筆者も当時の同盟は結社であったと見えています。周知のことかもしれませんが、そもそもマルクスもエンゲルスも共に同盟は結社であったと認めています(マルクスについては、例えば「1860年2月29日付フェルディナント・フライリヒラート宛マルクスの手紙」MEW, Bd. 30, S.495 [邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第30巻、398ページ]; また、エンゲルスについては、「マルクスと『新ライン新聞』(1848—1849年)」『デア・ゾツィアル・デモクラート』第11号、1884年3月13日付、MEW, Bd. 21, S.16 [邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第21巻、16ページ])。この点、本稿末にそのご論文の引用を長文にわたり掲げさせていただいた——筆者の恣意的引用でないことを示すためには止むを得ないもので、ご海容いただけると幸甚です——小林昌人氏および石塚正英氏には筆者の理解への誤解があるように思われますので、注記しておきます。なお、マルクスとエンゲルスは、結社を広い意味では党に含める点で、共通の見地に立っていました。エンゲルスは1865年執筆の「プロイセンの軍事同盟とドイツ労働者党」において、共産主義者同盟のことを「1848年のドイツの労働者党 (die deutsche Arbeiterpartei 1848)」(MEW, Bd.16, S.70; 邦訳『全集』第16巻、67ページ上段)と、はっきり書いています。エンゲルスのこの小冊子を、マルクスも書評を書いて紹介していますから、この点、同一の理解だったと考えるのが自然な捉え方になるでしょう。

どおりの意味は「共産主義の宣言」あるいは「共産主義者の宣言」です。

この二つの呼称は『宣言』起草以前からすでに並存していますが、別称を用いる場合にはいろいろな事情があったように思われます。

別称の用例の多くの目的は、欧文脈で同一語の重複を嫌うための文字どおり言い換えという修辞上の場合です。それを除けば、略称としてでしょう。とはいえ、略称の場合には、「宣言 (das Manifest)」とのみ記される場合が多いようです。もちろん別称 (Das Kommunistische Manifest) も使用されはしますが、他方で、本来の表題の短縮である「党宣言 (Manifest der Partei)」という用法も混在しています。ですから、これらの使用例それぞれになんらか特別の意味を見出すことは、以下に示す諸用例を除けば、困難であると思います。

したがって、別称 (Das Kommunistische Manifest) は一般に、本来の表題と並存、混在し、通称、略称として用いられていたと考えることができるわけです。

ただ、別称の用例のうち、単に略称とのみ見ることのできないものがいくつかあります。

その第一は、綱領討議から起草にかけての時期の用例です。そのさいの強調は、当初の問答体であった諸草案に対して、宣言形式にするというところに置かれていました (拙著251ページ脚注53)。なお、ちなみに、単に「共産主義者同盟の宣言」という表題にとどまらず、「共産主義者の党の宣言」という党に強調を置く表題となったのは、この間の討議の過程で、マルクスおよびエンゲルスが共産主義通信委員会創設以来追求していた、科学的社会主義と労働運動の前衛部隊との融合のための組織的活動が盛り込まれたからでしょう。

その第二は、別称が用いられる場合の多くをなすと思われるのですが、警察当局の郵便検閲に対して党組織を防衛するために「党 (Partei)」の字を伏せるという理由からの使用です。また、別称をさらに縮めた「k宣言 (k Manifest)」、「共宣言 (Komm Manifest)」という表記も見出されるのですが、このような場合、もとより単なる略称ではありませんで、党のみならず、「共産主義的 (kommunistisch)」という字をも伏せるねらいがあったように思われます。このような事情は一世紀半を越える隔たりのある今日では看過されやすいだけに、とりわけ留意される必要があります。

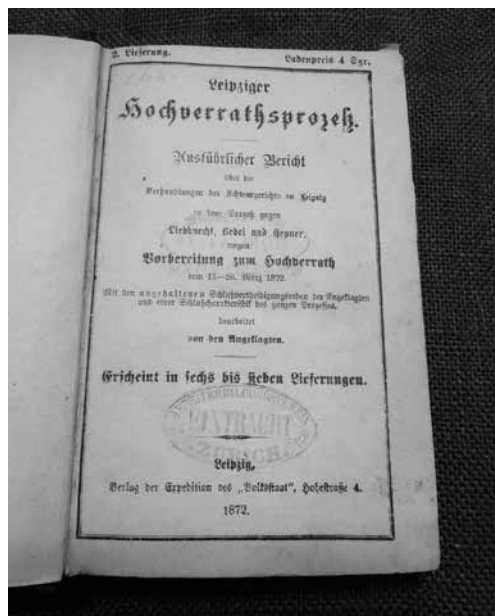
第三は、別称が実際に後の版本の表題として用いられた場合です。このような用例は1872年のドイツ語版以降です (その詳論は拙著第11章で行われていますのでご参照ください)。この再版は版とみなさないむきもあるかなり特殊な版本ですから、この特殊事情をわずかでも紹介しなければいけないでしょう。

大前提として、わが国で戦前、レーニンの『国家と革命』とともに『共産党宣言』が国禁の書であって、発行しようものなら、治安維持法違反に問われ、極刑の死刑を覚悟しなければならなかったのとはほぼ同じ事態が、当時のドイツに存在していたことを知らなければなりません。『宣言』を出版したならば大逆罪に問われるのは確実だったのです。それにもかかわらず、なぜ発行できたのでしょうか？

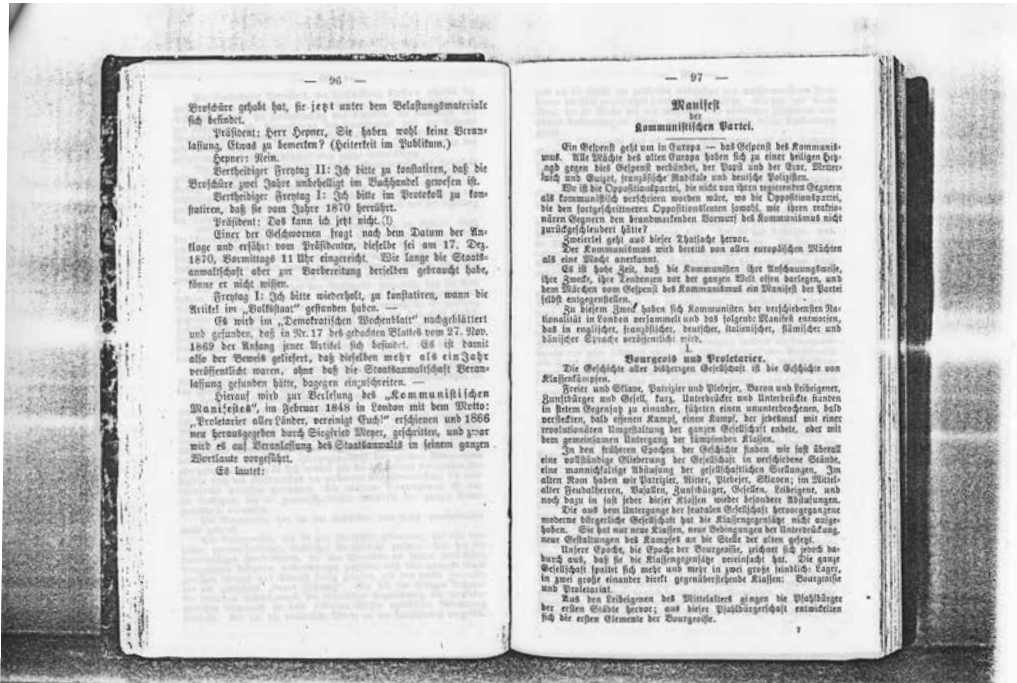
当時、マルクス、エンゲルスの思想の影響をうけたドイツの労働者たちは、社会民主労働党に結集していました。1872年という年記からも分かります通り、その前年までにはドイツ＝フランス

(普仏)戦争が戦われていました。1870年9月に同党のブラウンシュヴァイク委員会は、スダンの会戦以後は侵略戦争の性格をもつに至ったこの戦争の続行に反対する闘争をよびかけるために、戦争についての『社会民主労働党委員会の宣言 全ドイツの労働者へ!』をリーフレットで発表し、機関紙『フォルクスシュタート』紙上にも掲載します。リーフレットの普及部数は一万部にのぼりました。当局は宣言発表の4日後にブラウンシュヴァイク委員会の主だったメンバーを逮捕、要塞に拘留します。また、社会民主労働党は議会にアウグスト・ベーベルやヴィルヘルム・リープクネヒトら数名の議員を擁していましたが、彼らは議場の演壇で反戦平和を求めて政府批判の演説を行い、政府提出の戦時公債発行による戦争継続のための追加支出案に否決の動議を提出し、追加支出案の採決にさいしては反対投票を行いました。

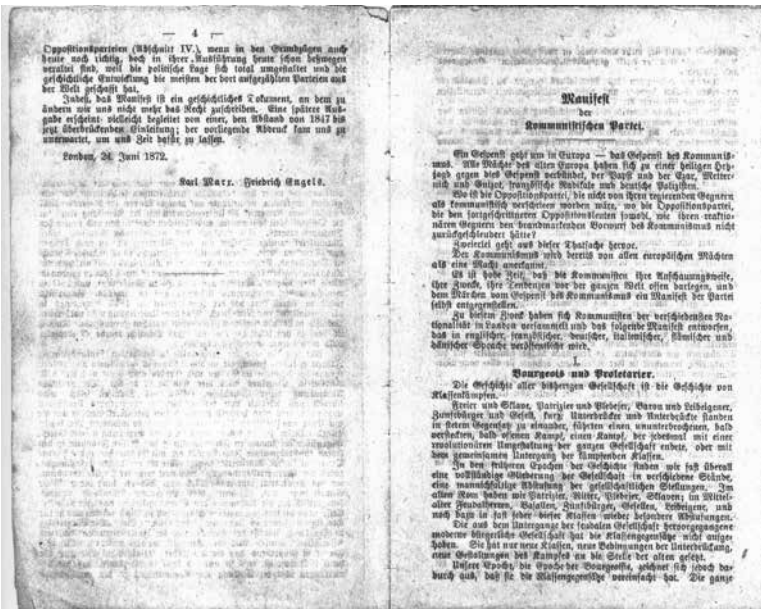
このような社会民主労働党の活動がフランスに対する征服戦争の遂行にとって危険であるとみたプロイセン政府は、ブラウンシュヴァイク委員会の逮捕にさいして得られた通信をもとに、大逆罪をでっち上げ、同年12月、ベーベル、リープクネヒトおよびアードルフ・ヘプナーを逮捕し、裁判にかけます。「ライプツィヒ大逆罪裁判」として著名で、各国から多くの報道関係者が傍聴に集まりました。『共産党宣言』は大逆罪を立証する証拠書類としてむしろ検察側から全文が提出され、その指示に基づいて審理にさいしてすべて読み上げられました。そのため、当時、出版したならば確実に大逆罪にとわれる文献であった『共産党宣言』が審理記録に掲載する形でまったく合法的に出版することが可能となったのです。リープクネヒトらは裁判報告『ライプツィヒ大逆罪裁判』を分冊形式で発行し〔拙著330ページ(写真1)第2分冊表紙〕、『宣言』をその第3分冊に収録します〔拙著330ページ(写真2)第2分冊最終ページと第3分冊最初のページ〕。「その裁判報告書は、



(写真1) 裁判報告『ライプツィヒ大逆罪裁判』第2分冊表紙〔尚絅大学服部文庫所蔵〕  
〔拙稿「社会思想史・運動史研究のための宝庫「服部文庫」—裁判報告『ライプツィヒ大逆罪裁判』(1872年刊)を例に—』『尚絅学院大学紀要』第65号, 2013年7月, (42) ページから〕



(写真2) 『ライプツィヒ大逆罪裁判』第2分冊最終ページおよび第3分冊冒頭ページ  
 [服部文男旧蔵(現, 尚絅大学服部文庫蔵)から]



(写真3) 1872年ドイツ語版の序文末およびハーフタイトルと本文冒頭部  
 [社会史国際研究所(アムステルダム)蔵から]

社会主義諸文献の豊富な武器庫としてアイゼナッハ派の人々の重要な宣伝文書の一つとなったのであって、60年代にはドイツで多くて数百部しか普及されていなかった宣言を、今や数千部規模で入手可能にした」（拙著253ページ）というわけです。そのような普及には分冊の出るつど、何回か『フォルクスシュタート』紙上に掲載された広告も大きな力となったでしょう。

それと同時に、この第3分冊の組版を用いて、『宣言』の部分に両著者マルクス、エンゲルスの新たな「序文」を付して著者認定本の体裁をとったものが、本文の棒ゲラへのエンゲルスの校正をも得て、新たな大逆罪裁判の危険を冒すのを避けるためになんらの表だった広告もなしに党内向けにのみただ非常にわずかの部数で、発行されたのです。このいわば別刷りこそがいうところの『宣言』1872年ドイツ語版でして、非常に特異な版本なのです。そのタイトルページ（扉）ではじめて別称が表題となりました。これは審理にさいして被告や裁判長が、その当時までにすでに通称となっていた別称で呼んでいたことを反映しているものと思われます。が、いわゆるハーフタイトル（内題）は無論、本来の表題のままです〔(写真3) 1872年ドイツ語版「序文」末ページと本文冒頭ページ〕。被告らの側で別称を用いたことにあえて意味を見出すとすれば、共産主義者同盟は過去のすでに解散された政党であり、彼らのドイツ社会民主労働党とは異なる組織であることを示すために「党 (Partei)」という言葉ははずした可能性は考慮に入れておいてよいのではないのでしょうか。

報告者（橋本）の2つの論文<sup>3</sup>に対する反響として、小林昌人氏（資料2）と石塚正英氏（資料3）お二人の論文からの引用を本稿末に掲げておきます。

## 2. 『ドイツ語ロンドン新聞』における『共産党宣言』最初の連載から分かること

書物の刊地が偽装されるのは、アンシャンレジーム期のフランス啓蒙思想の諸著作などでは普通のことでした。今後の新しい『マルクス／エンゲルス全集』（新MEGA）に『宣言』が収録された折に、どのような編集者の解説がなされるかも興味深いところです。とはいえ、新MEGA『宣言』所収巻I/6は近刊との広告はずっと出ておりますものの、依然として未刊です。したがって、『宣言』初版発行に関する現時点での最新の研究成果としては、報告者が検討したところでは、ヴォルフガング・マイザーの所説に依拠すべきでしょう。それに依りますと、印刷所は、表紙や扉に記載された「ビショップスゲイト、リヴァプール・ストリート、46。」ではなく、「フィッツロイ・スクウェア、ウォレン・ストリート、19.」、つまり、当時の週刊紙『ドイツ語ロンドン新聞』の印刷所となります。

『ドイツ語ロンドン新聞』の社主はブラウンシュヴァイク公カール2世ですが、編集・印刷・発

<sup>3</sup> 橋本直樹「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第39号、1993年11月、57～76ページ（上掲拙著の第11章の初出稿です）および橋本直樹「『共産党宣言』普及史研究の諸成果」『経済』第29号、新日本出版社、1998年2月、122～141ページ（上掲拙著の第9章の初出稿です）、特に「四『共産党宣言』の二つの表題について」134ページ下段～137ページ下段。

行の実務を取り仕切っていたのは文字通り弱冠二十歳のヤーコプ・ルーカス・シャーベリッツでした。印刷工も1847年5月13日（木曜日）以降は、みなロンドン・ドイツ人労働者教育協会のメンバーばかりで占められるようになります。大公カール2世も思想的には共和政の熱心な支持者でしたから、当時のドイツに革命を期していた共産主義者同盟および労働者協会のメンバーとも一定の協力が可能であったものと思われます。二月革命勃発後は何度も活動資金の無心をするシャッパーに「共産主義者の物乞い」といった形容を日記（3月14日の項）に記しはしますものの、革命勃発前の2月19日頃にはシャーベリッツに『新聞』への『宣言』連載を許可し、28日にはその原稿料ともいえるような形で50 $\text{fl}$ をシャッパーとモルに与えています。

マイザーは『新聞』の発行体制をシャーベリッツの日記からこう推測しています。

「『ドイツ語ロンドン新聞』は週刊で、四つ折り判、8ページ立てに付録4ページという分量であった。毎週金曜日に配達された。この日には、すでに次号の組み版が、しかも、まずいつもは文芸欄の組み版が、開始された。新聞には、1847年5月13日以降、通常の植字工として、ルーイ・バムベルガーおよびルードルフ・ヒルシュフェルトが当たり、金曜日および土曜日にはシャーベリッツが臨時の手伝いをし、また月曜日には昼から夜中までシュロックスベルクとかいう男が一人加わった。火曜日にはページ組みがなされ、水曜日の午前中に、校正刷の印刷が始まり、昼以降に、しばしば夜中まで、校正刷が読まれ、同時に、この日に到着する最後の、重要なニュースがなお植字されることがよくあり、木曜日、午前中に念校（Revision）が行われ、午後に印刷が始まった。」（Wolfgang Meiser: *Das Manifest der Kommunistischen Partei vom Februar 1848: Zur Entstehung und Überlieferung der ersten Ausgaben*. In: *MEGA-Studien*, 1996 / 1, S. 92 / 93）

マイザーはこの『新聞』の印刷が行われていない曜日に、空いた印刷機を利用して『宣言』が印刷されたものと推定しているようです（拙著127ページ）。そして、7～8種類にのぼる印刷異本の存在のほとんどは印刷工がこの週替わりの印刷物の区別をするための目印とも見ているようです。

### 3. 『共産党宣言』初版の発行部数は従来説よりも10倍以上増え1万部超の可能性はある

『ドイツ語ロンドン新聞』の発行部数は時期により多少の変動があります。とはいえ、約1,000部と見てよいようです（拙著31 / 32ページ）。『ドイツ語ロンドン新聞』と『宣言』は共に1印刷ボーゲン半で分量は同じです（拙著28ページおよび54ページ）。したがって、植字に取られる時間もほぼ同じものだったと見てよいでしょう。マイザーの推定によりますと、『宣言』は、毎週、『ドイツ語ロンドン新聞』の印刷所において、同新聞の印刷が行われていない印刷機の空いている曜日に、印刷されたこととなります（拙著127ページ）。ここから、『宣言』は、『ドイツ語ロンドン新聞』と同様、1週間で1,000部刷ることが可能であったことが分かります。

『宣言』にはロンドン・ドイツ人労働者教育協会の所蔵する活字セットが用いられました。協会がその返却を求めたのは1848年6月6日（火曜日）の会議においてです。その時点で活字セットを

すぐに返却し、摩損した活字の入れ替えなどはできなくなりますから、その後は『宣言』の印刷はなされなかったものと仮定します。すると、『宣言』が印刷された可能性のある期間は、2月20日（日曜日）で始まる週から5月28日（日曜日）で始まる週まで、15週間あったということになります。もしこの15週、毎週1,000部ずつ刷ったとすれば、15,000部となります。これが可能性として最大の印刷部数です。

一方、異本の種類からもある程度の推定ができます。異本は8種類は伝承されて伝存しています（拙著70/71ページ下段）。一つの異本につき1,000部刷られたと仮定するならば、8,000部となります。さらに、伝承されなかった異本が2種類ほどでもあれば、この仮定ですと、10,000部となります。

他方で、原版刷り（直刷り）の限度もあります（拙著46ページ脚注3）。一般に5,000～6,000部のようです。

これらを勘案しますと、『宣言』は最低で5,000～6,000部、最大で15,000部印刷されたであろうことが推測されます。

これまで『宣言』の発行部数についての通説は、ネットラウの会計帳簿の支出項目などからアンドレアスが推定して1,000部とされていました。これが格段に増すことになります。1848年革命への影響はじめ、その影響力もこれまでの想定よりもかなり大きかったのではないかと改める必要があります。

## 〔資料〕

### 〔資料1〕

植村邦彦「(研究動向) 社会主義体制の崩壊とマルクス思想」『経済学史学会年報』第34号、1996年11月、105/106ページから。ゴシック体（見出しを除く）ならびに下線および波線は橋本による。この論稿の当該箇所は後に植村邦彦『マルクスを読む』（青土社、2001年）の12/13ページに収録されています。

#### 「1. 『共産党宣言』の再審

ソ連・東欧における「革命」は、政治的には、共産党の一党独裁から多数政党制に基づく議会制民主主義への体制転換であった。共産党は体制転換の前後に各国で相次いで名前を変え、あるいは解散していったが、そのような状況の中で、マルクスの思想を共産党から切り離し、救い出そうとする試みが現れる。

村上 [1992] は『共産党宣言』（Manifest der Kommunistischen Partei）が1872年の再版で『共産主義宣言』（Das Kommunistische Manifest）と改題された理由を、マルクスが「共産主義者は決して政党を組織すべきではないということについて誤解のないように」したのだと理解し、彼は労働者階級の党については何度も語ったが、共産主義者同盟を党とは呼ばなかったことを確認する。したがって、マルクスの思想では「共産主義者が共産党員であるということ」はあ



りえず、「世界中の共産党が消滅しても、『共産主義宣言』は読みつがれ、共産主義者は生き残るのではないか」と結論づけられる。石塚 [1993] も、『宣言』そのものが労働者党とは別個の共産党の存在を否定していることを確認し、初版の表題は、党建設を主張するシャッパーやモルら旧来の同盟指導者との対立を回避するための「マヌーヴァー」にすぎないと推測している。

このような流れの中で『共産主義者宣言』と題された新訳（マルクス [1993]）も刊行された。これに解説として収録された柄谷 [1993] は、「共産主義者は諸個人であり、そうした諸個人の連合として同盟なりパーティがある」とする『宣言』は、共産党を自称する今世紀の前衛党とは「完全に異質」であって、『宣言』の意義は「世界の資本主義化」という「現在進行中」の事態を明らかにしたことにこそあり、「全地球の環境に及ぶ」資本主義の「諸矛盾を止揚しようとする闘争が各所であるならば」、そう名乗ることがないとしても「そこに『共産主義者』がいるだろう」と結んでいる。

それに対して橋本 [1993] は、1872年版のタイトル・ページは『共産主義宣言』だが、本文冒頭のーフタイトルは『共産党宣言』のままであることを指摘し、前者は「別称ないしは通称、略称」であって「なんら特別の意味を持つ呼称ではなかった」と断定する。しかし、引用された1860年代以後の諸資料が示しているのは、マルクス、エンゲルス、ベーベル、リープクネヒトらがすべて一致して『共産主義宣言』と書いているという事実である（橋本はそれをすべて『共産党宣言』と訳出している）。橋本は「このように短い表題が支配的となった諸事情はそれとして検討されなければならないが今それは措く」と述べるが、このことの意味こそが村上や石塚の問題だったはずである。

## 参考文献

- 村上隆夫 [1992] 「マルクスは『共産党宣言』を書き遺したか」『未来』No.305, 2月  
石塚正英 [1993] 「Kommunisten は Partei を超えている 『共産党宣言』と政党の廃絶」、『専修大学社会科学研究所月報』No. 356, 2月  
マルクス、カール [1993] 『共産主義者宣言』金塚貞文訳、太田出版  
柄谷行人 [1993] 「刊行に寄せて なぜ『共産主義者宣言』か」, マルクス [1993]  
橋本直樹 [1993] 「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」, 鹿児島大学『経済学論集』第39号, 11月」

## (資料2)

小林昌人『『共産党宣言』における「党」と「結社」——固有名詞ではない「共産党」の位相』『情況』1998年7月号別冊（情況出版）69～73ページから。

「二 〈「主義」宣言〉説の論拠の脆弱性

[……]『宣言』を「共産主義(者)」の宣言なりとする、近年の論(〈「主義」宣言〉説)では、

例えば次のように主張される。

『宣言』は「共産主義者同盟 The communist league によって出された文書であり、それ以後『共産党』が結成されたわけではなく、またそれが目指されたわけでもない。『党』という語には、レーニン以後に与えられたような特別な意味はなかった。パルタイとは、登山のパーティというような意味であり、それは『共産主義者同盟』と大差がなかった。「『共産党宣言』は今世紀の『共産党』と何の関係もない」。『宣言』当時現存したのは「共産主義者たちのパーティ、つまり連合以外のなにものでもなく」、しかも「共産主義者は諸個人であり、そうした諸個人の連合として同盟なりパーティがある」。「かくして、『共産党宣言』という名称は、それが当時もち、また今日もつであらう意義からみて、『共産主義者宣言』と訳し変えねばならない。実際、英語では通常 Communist Manifesto と呼ばれている」（柄谷行人「刊行に寄せて——なぜ『共産主義者宣言』か」、金塚貞文訳『共産主義者宣言』、太田出版、1993年、111頁以下）。

柄谷氏が「今世紀の『共産党』」を『宣言』に押し込むことの非を衝いているのは、まったく正しい。ただ、——氏の断片的な記述からは必ずしもその意とするところが判然としないが——「パルタイ」も「同盟」も共産主義者たちの「諸個人の連合」にすぎないという認定には、無理があるといわざるをえない。これでは、登山パーティも焼肉パーティも共産主義者同盟も、十把一絡げとなってしまうからである。マルクスが『ケルン共産主義者裁判の真相』で書いている通り、「共産主義者同盟」は「プロレタリア党の組織化を秘密裡に推進する結社であった」（MEW, Bd. 8, S. 461）。つまり「秘密結社」（*ib.*）である。

〈「主義」宣言〉説をおそらく最初に唱えたのは村上隆夫氏であるが、氏の小論「マルクスは『共産党宣言』を書き遺したか」（『未来』1992年2月号）では、問題が柄谷氏よりも詳しく検討されていた。氏はこう述べる。「たしかにマルクスとエンゲルスは1848年に『共産党宣言（Manifest der Kommunistischen Partei）』という表題の小冊子を出版している。しかし1872年に彼らの序文を付して出版された再版では、その表題は『共産主義宣言（Das Kommunistische Manifest）』に改められており、それ以後の版ではこの表題が定着している。英語文献では、この小冊子は殆どつねに Communist Manifesto と表記されているが、これは1872年版以後のこの表題に依拠したものである。「マルクスの最終的な意図を正しく捉えようとするならば、この著作をあくまでも『共産主義宣言』として読むべきなのである」。

氏のいわゆる「マルクスの最終的な意図」という問題にはすぐ後で立ち返ることにして、もう少し紹介を続ける。「1848年の『共産党宣言』において共産党と呼ばれていたものはいったい何かといえ——と、氏は暫定的に（？）誌す——、それは、1847年にロンドンで結成された共産主義者同盟 der Bund der Kommunisten のことであり、共産党とはその異名ないしは仮名である」。しかし、同盟イコール党なのではない。「共産主義者同盟は、労働者階級が政党を組織して国家権力を奪取するのを援助するための結社であって、それ自身は決して党や政党ではないのである。したがって、マルクスの考えでは、労働者党やプロレタリアートの党といったものは、共産主義者同盟という結社とは完全に別のものであり、後者がやがて前者に発展する

ということも決して想定されていなかったと見なされなければならない。[マルクスによれば、党・政党 (Partei) とは、ある階級が国家権力を掌握して他の階級を抑圧するために組織するものである。そして彼は……労働者階級は党を組織して国家権力を握らねばならないとつねに主張している]。「したがって彼は、『労働者階級は政党を組織してはならない』という主張には反対しつづけた」。が、「この政党は、あくまでも労働者が自分たちで組織し運営すべきものであった。そして共産主義者たちは全力を尽してそのことを援助しはするが、自分たちで共産党という党を組織して国家権力を獲得すべきだとは、マルクスは決して考えなかったのである」。

引用が長くなったが、村上氏の主張は、要するに、①「党・政党」は労働者が組織するものであり、「共産主義者同盟」はそれを「援助するための結社」である、②この点について「誤解のないように」72年版でマルクスは書名を変更した、この書名変更には「マルクスの最終的な意図」が込められている、というものである。①の論点——おそらく氏にとっても主張の眼目——については、本稿の叙述全体をもって応ずることにして、ここでは①のいわば「証拠」として挙げられている②の論点について検討しておくことにしたい。

72年版では確かに標題が「変更、されている。しかもこの版は——1848年に共産主義者同盟の公然部門でもあったロンドン「労働者教育協会」の出版物として匿名で出版された初版や、その後の種々の異本・再版と異なり——マルクス・エンゲルスの名が著者として明記され、著者による「序文」が初めて付けられた「著者認定本、であるだけに、「マルクスの意図」を詮索したくなるのも無理からぬものがある。しかし、この詮索は、橋本直樹氏の論稿「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」(鹿児島大学経済学会『経済学論集』第39号、1993年)における詳細な文献学的検討によって根拠を失った。橋本論文の綿密な考証を逐一引用する余裕はないので、ここでは要点だけ紹介しておこう。

72年版出版の機縁は法廷にあった。ドイツ社会民主労働党(いわゆるアイゼナッハ派)が展開した反戦闘争でバーベル、リープクネヒトら幹部が逮捕され、大逆罪に問われたライブツィヒ大逆罪裁判(72年3月)において、バーベルらは法廷を宣伝の場として利用し、『宣言』を読み上げたのであった。検察側の請求で『宣言』は証拠として提出され、裁判記録に全文が掲載された。裁判の様子が保守系も含む新聞各紙で報じられる中、社会民主労働党もパンフレットの分冊形式で逐次裁判記録を公刊した。公文書の再刊であるため、検閲を受けることなく宣伝文書をドイツ国内で配布できる機会が与えられた格好になる。6月に出たその第3分冊には『宣言』も含まれていた。この第3分冊中の『宣言』部分だけを——同じ版型を用い、著者の「序文」と表紙を加えて——別刷の形にしたもの、それが72年版である(これは市販されず、ドイツ社会民主労働党の内部で配布されたと推定されている)。別刷に付された表紙には『共産主義宣言』と印刷されている。しかし、裁判資料の別刷であるから、資料=テキスト部分の冒頭に記された書名(ハーフタイトル)は正式の『共産党宣言』となっている(橋本氏の慎重な文献学的表現を筆者流に増幅して言えば、72年版での「書名変更」とは、実際には、表紙に印刷

された標題が収録資料中の正式名と異なるということにすぎない。』

さて、この「変更」は、マルクス・エンゲルスの「指示」によるものなのか？ 橋本氏が紹介している一連の——とりわけ別刷作成に中心的な役割を果たし、著者たちに「序文」執筆を繰り返し要請したりブクネヒトと、それに应对したエンゲルスの——手紙の内容と日付、別刷の成立経緯を見る時、氏は断定に及んでいないが、マルクス・エンゲルスがこの変更を知っていた可能性は極めて低いといわざるをえない。少なくとも、変更を指示ないし示唆した形跡はない。

概略以上のごとき刊行経緯の検覈を踏まえて、橋本氏は「表題の変更について」次のように述べている。「短い表題 Das Kommunistische Manifest [共産主義宣言] は長い表題 Manifest der Kommunistischen Partei [共産党宣言] の別称ないしは通称、略称」である。ライプツィヒ大逆罪裁判や72年版刊行に至る関係者の手紙などの「諸資料のほとんどすべてにおいて短い表題……が用いられており、例外をなすのは裁判報告書およびその別刷に再録された『宣言』本文に先立つハーフタイトルのみである」。従って「裁判記録の別刷として発行された」72年版が表紙に「短い表題」を掲げたのは、発行者が「審理における呼称を維持した」までのことである。何らかの「変更の意図」があったとすれば、それは著者たちではなく発行者側に求められねばならない。発行者の側には、「特にそれが1848年時点の文書であり、表題にある『共産党』は当時の共産主義者同盟を指し、現存する党、ことにドイツ社会民主労働党ではありえないことを強調するという事情」が推量される。「現存する党」との混同を回避したいという事情は、「ドイツで短い表題がその後も長く続いたことを説明する理由ともなり得るものである」。

橋本氏の「『共産党』は当時の共産主義者同盟を指し」とする認定には同意しかねるものの、論旨はほぼ首肯できるものである。村上氏は「マルクスの最終的な意図」を汲むべく「書名変更」に着目したのであったが、マルクス（あるいはエンゲルス）の意図を問題とするならば、別途のアプローチが必要であった。

ところで、村上氏が72年版にマルクスの「最終的な意図」を読み取ったのには、これ以後の諸版では『共産主義宣言』という「党」抜き書名が定着しているというもう一つの認定が絡んでいる。だが、「意図」を問う以上は、著者と無関係に出版されたものではなく、著者が関わった版に即して検討されなくてはならない。

なるほど、ドイツ語版では72年版の標題がその後も踏襲されている（83年版、90年版）。それゆえ、この標題がマルクス・エンゲルスにとって少なくとも「追認、しうるものであったことは間違いあるまい。そこには、橋本氏の指摘する「現存する党」との混同を防遏せんと判断も、おそらく介在したものと付度される。では、ドイツ語版以外ではどうか。著者たち（83年3月のマルクス没後はエンゲルス一人）が序文を書いている外国語版は四つあるが、『共産主義宣言』と題されているのは92年ポーランド語版のみである。72年ドイツ語版を基にした82年ロシア語版、エンゲルスが校訂にあたり、「著者認定訳」として出版された88年英語版（サミュエル・ムーア訳）、そして93年イタリア語版、これらはいずれも『共産党宣言』となって

いる。もちろん、72年版の例もある以上、序文を書いたことがそのまま書名を「認定、したことの証拠となるわけではない。しかし、エンゲルス自身が詳しく校訂し、本文中に註も加えるなどした疑いなしの「著者認定」版である88年英語版が『共産党宣言』と題されている事実は銘記さるべきであろう。」

### (資料3)

石塚正英「共産党宣言は共産主義者宣言である——『共産党宣言』と政党の廃絶——」『共産党宣言—解釈の革新』（御茶の水書房、1998年3月）165/166, 175/176ページから。

「パリ・コンミュンの翌年、マルクス・エンゲルスは『共産党宣言』第2版を刊行する。[……]

1872年の『宣言』をみると、表題にちょっとした変更の加えられていることに気づく。初版の Manifest der Kommunistischen Partei が、Das Kommunistische Manifest と改められている。Partei の一語が削除された。そのことにつき、例えば1945年にディーツ社で刊行されたドイツ語版『宣言』の編者は、1872年以来そのように簡略化されて呼ばれたとしているだけで、なぜ簡略化されたかについての説明は加えていない。

その点については、橋本直樹「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」があきらかにしている。同論文によると、この新版刊行を精力的に推進したのはマルクス・エンゲルスでなく、ヴィルヘルム・リープクネヒトである。但し、当時の政治状況からすると、『宣言』新版を共産主義者の側で刊行すれば大逆罪に問われる危険性があったので、それはできなかった。しかし折しも、1872年3月、ライプツィヒの陪審裁判所でリープクネヒト、アウグスト・ベールおよびアドルフ・ヘプナーに対する大逆罪裁判が行なわれ、その際に裁判報告の審理文書の一つとして、公然としたかたちで「『宣言』をドイツで出版する、予想外の機会が訪れたのである」<sup>(23)</sup>。すなわち、リープクネヒトは1872年4月、『ライプツィヒ大逆罪裁判』を分冊形式で刊行したが、その第三分冊に『宣言』が含まれていたのだった。

マルクス・エンゲルスは、この第三分冊に含まれる『宣言』の版をそっくりそのまま活用した上で別刷りし、それに兩名の署名つき序文を新たにつけて、『宣言』第二版を刊行したのだった。橋本論文によれば、その際マルクス・エンゲルスはこの新版の校正刷りを実見していない。よって、兩名は、『宣言』表題から Partei の一文字が欠落していることを、事前には知らなかったのである。第二版で Partei の一語が削除されたのは、マルクス・エンゲルスの意向によるのではなく、リープクネヒトらの意向によるのでもない。第二版表題からこの一語が欠落したのは、「裁判記録の別刷として発行されたものであるから、なによりもその審理における呼称を維持したという」理由によるのである<sup>(23)</sup>。[……]

(23) 橋本直樹、「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」, 鹿児島大学経済学会『経済学論集』第39号, 1993年, 67頁。なお、この橋本論文を著者からおくられ参照するまで、私は、『宣言』第二版の書名変更にはマルクス・エンゲルスの意向が第一に反映しているものと判断していた。兩名は自ら意識的に書名を変更したものと考えていた。これは誤った判

断であった。本稿冒頭の「問題の所在」に記した私の口頭報告（経済学史学会・関東部会，1993年3月）およびそれをおなじ論題で文章化した拙稿「Kommunisten は Partei を超えている——『共産党宣言』と政党の廃絶——」（『専修大学社会科学研究所月報』第356号，1993年）は，その誤解の上に立っている。その点について橋本論文は，脚注（2）で指摘している。その指摘は正しいのであって，本稿では事実誤認の箇所を削除し，記述を改訂した。橋本氏には感謝する。『宣言』第二版における書名変更の動機について，これを「通称にしたがった」（75頁）とする橋本論文の判断は私の採らない立場であるが，書名変更の事実経過について知るには，もっかのところ上記橋本論文が最新にして最良の文献である。なお，本稿校正中の1998年2月上旬，橋本氏より新作「『共産党宣言』普及史研究の諸成果」（『経済』1998年2月号）をおくられたが，その行論中には書名変更の理由がいっそう詳しく記されている。しかし，氏は共産主義者同盟を「政党」と理解した上で議論を組み立てているため，同盟を「結社」とみなす私の立論とは一致しない。結社と政党の差異については注（6）に挙げた私の論文を参照。」